

【令和5年度足立区総合教育会議】会議概要

会 議 名	令和5年度足立区総合教育会議		
事 務 局	政策経営部政策経営課		
開 催 年 月 日	令和5年10月26日(木)		
開 催 時 間	午後1時14分～午後2時32分		
開 催 場 所	足立区役所南館8階 庁議室		
出 席 者	区長 近藤 弥生	教育長 大山 日出夫	教育委員(教育長職務代理者) 小関 朝之
	教育委員 早川 貴美子	教育委員 倉橋 さとみ	教育委員 久保田 善彦
	政策経営部長 勝田 実	総合事業調整担当部長 楠山 慶之	教育指導部長 岩松 朋子
	学校運営部長 絵野沢 秀雄	子ども家庭部長 上遠野 葉子	こども支援センターげんき所長 橋本 太郎
	政策経営課長 伊東 貴志	教育政策課長 田巻 正義	教育指導課長 八尋 崇
	教育相談課長 森田 路子	学校法人三幸学園 理事 野崎 幸治	学校法人三幸学園 事業開発部/教育開発部 統括部門長 高岡 昌弘
	学校法人三幸学園 東京みらい中学校 校長 定野 司	学校法人三幸学園 特例中学校・児童発達支援 センター設立準備室 部門長 齋藤 貴雄	
欠 席 者			
会 議 次 第	別紙のとおり		
資 料	<ul style="list-style-type: none"> ・次第 ・出席者名簿 ・座席表 ・説明資料「足立区における不登校対策」 ・説明資料「東京みらい中学校の取組み」 ・参考資料「東京みらい中学校2024年度学校案内」 ・参考資料「2024年度生徒募集要項」 		
そ の 他			

(審議経過)

○伊東政策経営課長

それでは、ただいまより令和5年度足立区総合教育会議を開催いたします。

私は、本日の司会を務めさせていただきます、政策経営課長の伊東でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

最初に、本会議は公開を原則といたしております。会議記録はホームページ上で公開させていただきます。

また、会議内容を正確に記録するため録音させていただきますいておりますことも、ご了承いただきますようお願いいたします。

公開用として、会議中の様子を事務局職員が写真撮影させていただきます。その点もご了解願います。

続きまして、席上のマイクの使い方をご案内いたします。発言の際は、大変お手数ではございますが、お手元のマイクのボタンを押し、ランプが点灯いたしましたら、最初に名前をおっしゃっていただいでご発言をいただきますようお願いいたします。お名前は会議録作成に必要なためでございます。発言が終わりましたら、再度ボタンを押してくださいませようお願い申し上げます。

それでは、議事に入ります前にお手元の資料の確認をさせていただきます。5点でございます。

まず、本日の次第、出席者名簿、座席表。説明資料として、同じものを席上のモニターにも投影いたしますが、「足立区における不登校対策」と書かれたものと「東京みらい中学校の取組み」といったホチキス留めのもの。そして参考資料として、東京みらい中学校の2024年度の学校案内及び2024年度の生徒募集要項でございます。以上でございますが、不足はございませんでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、次第に沿って進めさせていただきます。

まず、本日ご出席のご紹介をいたします。

教育委員の皆様からご紹介させていただきます。

まず、小関朝之委員です。

早川貴美子委員です。

倉橋さとみ委員です。

久保田善彦委員です。

本日は令和6年4月開校の東京みらい中学校を運営される三幸学園からゲストの方をお招きしておりますので、ご紹介いたします。

学校法人三幸学園理事の野崎幸治様です。

学校法人三幸学園事業開発部／教育開発部統括部門長、高岡昌弘様です。

学校法人三幸学園東京みらい中学校校長の定野司様です。

学校法人三幸学園特例中学校・児童発達支援センター設立準備室部門長、齊藤貴雄様です。

なお、本日は、区長及び教育委員会の求めに応じて、関係する区職員も同席をさせていただきます。区の職員の出席者につきましては、出席者名簿をご確認いただきますようお願いいたします。

本日の総合教育会議は、「学びの多様化学校の開校に伴う区不登校対策事業との連携」がテーマでございます。

議事に入ります前に、近藤区長からご挨拶申し上げます。区長、よろしく願います。

○近藤区長

今日は、お忙しいところ、皆様、お差し繰りいただきまして、ご出席ありがとうございます。

今、司会から話がありましたとおり、今日のテーマは不登校ということでございます。足立区でも年間1,000人を超える不登校がいるということで、大分早くから手を打ってまいりました。その結果、現在の東京都や国の出現率といえますか、平均の不登校者数と比べますと、一定程度の抑えが効いているというふうに、後からご報告させていただきますけれども、といっても急激に減

らすことができているという状況ではございません。

不登校対策は、今さら私が申し上げるまでもなく、何か一つが原因ということではなく、様々な複数の複雑な問題が絡まって不登校という形に現れるということですので、何かこれだけ一つやっついていけば改善できるということではなく、ありとあらゆる対策を打つ必要があると思いますが、そうはいいまして、限られた人員と財源の中で、より効果的な対策を打っていく必要がございます。また、足立区という地域性に根差した対応も必要だと考えておりますので、今日は、現在、足立区が行っている対策、そしてまた学びの多様化学校ということで様々なノウハウをお持ちの三幸学園の皆様方から、今までのご経験に根差したご提案なり、これからの取組をご披露いただきまして、これからのあるべき足立区の方向性、対策について、まさにこの会議の名称のとおり、総合的に議論ができればと思っております。

限られた時間ではございますけれども、この会議が終わった後に、これでまた一つ前進だねと皆さん方に思ってもらえるような会議になりますように、ぜひ闊達なご意見、またご発言をよろしくお願いいたします。

ありがとうございました。

○伊東政策経営課長

それでは、議事を進めたいと思います。

次第の3番になります。「足立区における不登校対策」につきまして、教育長からご説明申し上げます。

大山教育長、よろしく願いいたします。

○大山教育長

教育長の大山でございます。どうぞよろしくお願いたします。着座で説明させていただきます。

画面にも資料が出ておりますけれども、資料に基づきましてご説明させていただきたいと思

います。

「足立区における不登校対策」ということで、まずは現状をご説明させていただければと思います。

資料の左上にございますけれども、本年の10月5日に新聞報道でも大きく掲載されましたので皆様ご案内と思っておりますけれども、日本全体での小中学校の不登校者数は全国で29万9,048人ということで、ほぼ30万人に近づいているというのが実情でございます。前年度比の増加率については、全国は22%増、東京都は25%増ということでございます。

そして足立区はどうかというところでございますけれども、資料の一番右端をご覧くださいますと、トータルで1,162人、これは小中合わせてでございますけれども、人数については過去最多、前年度比17%増ということで、令和3年度まで何とか1,000人にいかないでこらえていたところではございますけれども、ついに1,000人を超えてしまったという状況でございます。

中でも、真ん中に書いてございますけれども、中学生が約7割ということで、小学生、中学生の両方に不登校はいるわけですけれども、中学生の割合が非常に高いということが特徴になっているかと思っております。

次のページをお願いいたします。

そこで、不登校の学年別の推移をご確認いただきたいと思っております。下段が小学生、上段が中学生ということでございますけれども、特に中学校1年生が、小6から中1で約2倍へ増加しているということでございます。

こちらに記載はございませんけれども、中学生になると非常に不登校が増えるということで、各校に配置をしておりますスクールカウンセラーによりまして全員面接を小学校5年生と中学校1年生で行っておりますけれども、実態として中学校1年生が人数としては非常に増えてしまっ

ているという実情でございます。

次の資料をご覧くださいなのですが、先ほど区長からもありましたが、不登校者の割合の推移でございます。

資料をご覧くださいますと、ちょうど平成28年の頃が、国や東京都との差が非常に顕著に開いていた時期でございます。その後、いろいろな対策を打っていった結果、令和3年に東京都、国の平均を下回る状況になっておりまして、令和4年現在でも、若干ではございますけれども、国の割合よりも下回っているという状況でございます。

次のページをお願いいたします。

以上のところから、令和4年度における区立小・中学校におきましては、対前年度増加率並びに不登校生徒の割合につきましては、国及び東京の数値を下回っているということでございますけれども、これについては個々の不登校の状況に応じた多様な支援を継続的に実施してきた効果が現れているものと解釈しておりますけれども、具体的にどのような支援を行ってきたのかというところで、次のページでご説明させていただきたいと思っております。

資料の一番左端をご覧くださいと思うのですが、緑色になっておりますけれども、「子どもの状況に応じた多様な支援メニューで学びにアクセスできる」と記載してございます。不登校に陥った原因は、成績のことであったり、交友関係であったり、親子の関係であったり、本当に様々だとは思いますが、そのお子さんの現在の状態に合わせて、区のほうではいろいろな支援を用意しているという状況でございます。

左側から少し右のほうに行きまして、まずは登校できるのか・できないのかというところで大きく振り分けをしております、一番上の教室に自力登校できる、教室に入れるのだけれども居心地が悪い、不登校予備軍のところ。これは後ほどご説明させていただきます。

登校できる中で、自力で登校はなかなかできな

いのけれども、来れば教室には入れるよというお子さん、こういうお子さんについては右側をご覧くださいなのですが、お迎え支援ということで、登校サポーター、これは民間、区民の方でございますけれども、登校サポーターによる登校時のお迎えというようなことでの支援をしております。

また、登校できるけれども教室には入れないというお子さんについては、別室登校支援ということで、学校内で別室を用意してございますけれども、登校サポーターの方がそこで寄り添い支援を行い、登校の定着を図っていく。このような対策をしております。

今度は下の段でございます。そもそも学校に登校できませんというお子さんです。その中でも外出は何かできるという方については、学習支援を中心という部分で、教育相談を経て入級するということとなりますけれども、③にございます教育支援センターで、学校外ではございますけれども、西新井、竹の塚、綾瀬の区内3か所にチャレンジ学級というものを用意しまして、学校以外での個別指導を中心とした学習指導・各種行事・集団活動ということで、登校を定着させていこうということと、併せて④でございますけれども、区内の中学校に併設した「あすテップ」で、不登校生徒に対する学校内における通級型の学習指導といったものを行っております。

また、コミュニケーション活動が中心という部分では、これもSSWがつないでいくわけでございますけれども、⑤にございますNPOの運営する居場所、これは区内に4か所ございますけれども、民間団体と連携した「居場所を兼ねた学習支援」、こういったところに通っていただいて、外に出て誰かとコミュニケーションを取るというようなことを定着化させていこうということで実施しております。

これは私も1か所現場を見ているのですが、お子さん方と年齢の近いNPOの若い方が、

いろいろなコミュニケーションを取ったり、勉強ももちろんするのですけれども、対人関係という部分でのハードルを少しずつ低くしているという状況でございます。

そもそも登校もできないし外出もできないというお子さんについては、対面による個別指導ということで家庭学習支援事業として⑥でございますけれども、いわば家庭教師のような形で具体的にそのお子さんのお宅に訪問し、勉強ももちろん教えますけれども、そのお子さんとコミュニケーションを取ることで、そういったコミュニケーションの部分を上向きさせている。学習ももちろんですが、そういった事業も行っております。

それから最後、一番下でございますけれども、対面で家に来られるのも非常にハードルが高いというお子さんについては、オンラインによる個別支援ということで、実施はもうすぐというところでございますけれども、NPO法人カタリバさんと協定を結びまして、r o o m-Kというメタバース環境の中で自分のアバターを操作しながら、パソコン上の学校に登校して、いろいろな支援員の方と相談をしたり会話をしたりということで学校生活を疑似体験してもらう。こういうような支援をしております。

全体を通してでございますけれども、ICTも活用して学習支援も行っているという状況でございます。

こういった取組を通じて、教室や学校への復帰、進学、進路の選択につなげていこうということで、そのお子さんの状況に応じた支援を実施しているという状況でございます。

次のページをお願いします。

その中で、不登校者数割合が全国に比べて少し低いですね、今までの取組の効果があつたのではないかとこの部分で、一番効果を上げているのが別室登校支援ということで、先ほどもちょっとお話をさせていただきましたけれども、登校サポーターによる学校内の別室での寄り添い支援によ

る登校定着ということで、右側の表をご覧くださいなのですが、先ほどお話ししました中学生の不登校が増えているということで、28年度の57人の利用から、令和4年度は240人まで増えております。お子さん方は、悩み事を人に打ち明けたり、そもそも家族と会話をしたりということもなかなか難しいという部分で、登校サポーターさんが寄り添い支援をすることである程度復帰するとか、ひどくならない状況が維持できるということが保たれているのではないのかなと考えているところでございます。

次のページをお願いいたします。

足立区における不登校対策の課題ということでございますが、先ほどもちょっとお話がありましたけれども、率については国ですとか都の率を下回ってはおりますけれども、依然として1,100人を超える不登校の数という部分では、いろいろな取組をしているのですけれども、何とか絶対数を減らさないといけないというのが大きな課題だと捉えております。

絶対数を低下させるためのさらなる取組が必要ということで、次のページをご覧くださいなのですが、不登校対策としては、未然防止、早期支援、長期化への対応ということで、不登校になってしまったお子さんに対しては、いろいろな場を用意してその子に合わせた対応をしておりますけれども、そもそも学校自体での不登校を減らさないという意味がないのではないかとこのことで、個々の学校に支援をしていくことで絶対数を減らしていこうと考えております。

これまでの不登校支援対策事業の推進と併せて特に未然防止に注力していきたいということで、特に中学校での対応を深めていきたいと考えているところでございます。

次のページをお願いいたします。

そこで令和5年度モデル実施事業ということで、現在、六月中学校でモデル実施中ございま

す。教室への入室が困難な生徒や一時の休息が必要な生徒に対して、気兼ねなく過ごすことができる部屋を校内に設置して、登校への敷居を低くすることで不登校を未然に防止していこう、そこに学校長のOB等の指導員が学習指導にも対応していこうというものでございます。

各中学校には今までも別室というものがございました。その別室支援とどう違うのかというのが下の表でございます。ちょっと説明させていただきたいと思います。

まずは対象者でございますけれども、今までは自力登校不可の者でしたが、今回のモデル事業では、自力登校は可ですけれども、教室にいられない者。

教室については、今回は別の部屋をご用意するのではなくて、別室登校で使っていた部屋を共有させていただくということでモデル実施しております。

また、支援員・指導員という部分では、先ほど登校サポーターのお話をしましたけれども、登校サポーターさんについても、1日3時間とか時間の制約がございます。ですので、交流会などでお話を聞きますと、自分たちが持っているお子さんの情報を学校の先生方にお伝えしたいのだけれども、なかなかお伝えできる場面もなかったりして少し物足りないなというような部分もあって、そういったお声も聞いて、今モデル実施をしている六月中では学校長のOBが常駐しながら、そのお子さんに寄り添い、なおかつ学習指導もできるという対応をしております。

支援の内容を今お話いたしましたけれども、相談・学習指導にも対応できる体制ということで、今までの別室登校のレベルを少しレベルアップしているという状況で、登校の定着から教室復帰・適した学習環境へのつなぎということで、各学校にこういったものをできれば設置させていただいて、学校での不登校をできるだけ減らしていきたいというのが今の考えでございます。

次のページをご覧くださいと思います。

現在、モデル事業を実施しておりますけれども、効果検証・課題は何なのかということでございます。

成果指標の設定例ということで、個々のお子さんのアセスメントシートを作成し、それを活用しまして、行動の変容が見られた生徒数、自己肯定感の向上が見られた生徒数、ほかの学習環境へのつなぎ件数、こういったものをそれぞれアセスメントシートに記しながら個々のお子さんの状況を把握していこうということで、一例でございますけれども、現在、六月中には17名のお子さんが通っておりますが、そのお子さんは、この別室支援がある前は、教室からいなくなってしまってトイレに閉じこもったり、ほかのところに行ってしまったりということで、担任の先生方もどこに行っただろうということで校内を探したりするわけですが、当然のことながら、その間クラスの授業はできないというような状況が続いていたわけですが、今回、常駐の先生がいるこの支援室ができたことで、お子さん自体も登校が安定し、その支援室のほうにできるだけいるというような状況ができるようになってきたということで、ほかの生徒さんの授業にも影響がなくなってきているという状況も出ております。

課題でございます。今、六月中の場合は同じ部屋を使っているということでございますけれども、今後、学校の状況もございまして、これまでの別室登校の生徒と支援場所を分けたほうがいいのか、一緒のほうがいいのか、それぞれのお子さんの状況もございまして、この辺の要否を確認していかなければいけないということと、常駐するというので、誰でもいけばいいよというわけでもございませぬので、その常駐する先生の人員及び質の確保をするところも大きな課題であるかなと考えております。

最後のページでございます。

本日、お忙しい中、お越しいただいて本当にあ

りがとうございます。来年の4月に東京みらい中学校が設立されるということで、私どもとしても非常に期待をしているところでございますが、記載の3つの柱で相互連携できればありがたいと考えております。

まず、柱1は相互交流ということで、フリースクールや大学の運営により蓄積された民間のノウハウを区の不登校支援に生かす相互交流ということで、本当に大きなところから細かいところまで様々あるかと思えますけれども、実践で培われたノウハウを、ぜひ区の公立中学校・小学校に生かせる部分は生かしていきたいと考えております。

また、柱2としてはICTの活用ということで、不登校の支援に特化したICTを活用した学習支援。どういう形で支援をやられているのか、具体的に拝見もさせていただきながら、ノウハウを共有させていただけるとありがたいと思っております。

最後に柱3でございますけれども、三幸学園様との連携によりまして、不登校生徒の職業体験活動、また若年者の学び直し支援ということで、各地でご展開をいただいている専門学校ですとか、そういったところでのご協力がいただけるようであれば、子どもたちも今の勉強はもちろんそうですけれども、将来の自分もイメージしながら今の学業を進めることができるのではないかなと考えております。

この柱については、またご相談させていただきながら、個々具体的なものを、いつまでに、どういうふうにとということも詰めさせていただければありがたいと思っております。

目標といたしましては、足立区の不登校の子どもに多様な支援を提供していくということで、本日を機会に様々なご協力をいただけると本当にありがたいと思っております。

私からの説明は以上でございます。

○伊東政策経営課長

教育長、ありがとうございました。

今、足立区の不登校対策の全体像ですとか考え方を教育長からご説明いただきました。最後に東京みらい中学校様との連携の案も出てまいりました。この後、東京みらい中学校の取組についてお話をいただくのですけれども、区の取組の全体のところのお話がありましたので、東京みらい中学校様から、全体像を聞いたところでご意見や感じたところがあればお話しいただこうと思えますが、いかがでしょうか。

○高岡氏

三幸学園の高岡です。お話しいただきありがとうございます。本中学校との連携につきましては、この後ご説明させていただき最後に、そういったところを触れさせていただこうと思っておりますので、そちらにてご説明させていただければと思います。

○定野東京みらい中学校校長

教育長を6年やらせていただいて、この中学校をつくるということで、非常に私も頼もしく思っています。当事者ではないみたいなことを言っていますけれども、これが当事者になって、そういったことを実現していきたいなど。

先ほど30万人に上ろうかという不登校がある。そのときに学びの多様化ということで、それまでの不登校特例校は名前も変えることになった、多様化していく。これはもはや不登校というのは個人の問題ではなくて教育システムの問題だと。ということは以前から私も思っていましたけれども、ここのところで大きく転換されたのではないかなと思っています。その意味では、このみらい中学校は、学びの多様化といったところの一面を担っていきける、そういったことが公教育にも大きな影響を与えると私は思っています。

多様化していくから、いろいろな学校ができて

ばいいのだというのではなくて、そもそも公教育ってどうだったのということをしっかりと踏まえる必要があると思っておりますので、ぜひこういう機会を利用させていただいて、私たちもそれをプラスにしていきたい、このように考えております。よろしくお願いいたします。

○伊東政策経営課長

ありがとうございます。

それでは、「東京みらい中学校の取組み」について、ご説明をいただきたいと思えます。

高岡様よりご説明いただきたいと思えます。よろしく願いいたします。

○高岡氏

改めまして、三幸学園の高岡です。

お手元にパワーポイントを印刷させていただいたものもございますので、そちらをご確認いただきながら、ちょっとかさばりますが、本校のパンフレット、学校の外観であったり、中身であったりとか、そういったところもビジュアルで出ておりますので、そちらも見いただながらご説明を聞いていただければと思えます。

1枚目。まず設置の趣旨ということですが、本校は来年の4月開校ということで、あくまでもこれからこういう中学校を目指していきたいということでご認識いただければと思えます。

まず最初に、本学として学びの多様化学校、これまで不登校特例校と呼ばれていたものを設置する理由ですが、最大の理由が本学のミッション、ビジョンの具現化になります。その中で、今回特に学びの多様化学校という特徴ある枠組み、制度をうまく生かしていきたいということになります。それから、足立区には東京未来大学がありまして、都内近郊には各種の専門学校がありますので、東京みらい中学校単体ではなく、一教育機関として今日的な教育課題であります不登校の問題に対して取り組んでいきたいという背

景がございます。

また、三幸学園としては、中学校という学校種、それから義務教育という領域に関しては初めてのこととなりますので、本学にとっても大きなチャレンジでございます。

今回、みらい中学校を設置して実現したいということに関しては、以下3つございます。

1つ目としては、不登校の生徒たちの中にある学校に対するネガティブなイメージであったり、印象というものを少しでも、学校の校舎も含めて、教員の関わり方であったりとか、そういったことから変えていくことで、登校するということに対するハードルを下げ、様々な生徒に対して学びの機会を展開するということです。

2つ目としましては、この特例校の制度を利用して、授業時間数は通例であれば1,015時間あるのですけれども、775時間という形に再編成しまして、義務教育の枠組みを基礎としながら、様々な学び方を生徒たちに提供していくということ。

3つ目としては、ビジョンミッションの下に、本学が持つ様々なリソースを生かしながら、地域と協働して不登校問題に取り組んでいく。

この3つを、みらい中学校を通して実現していきたいという形になります。

なお、入学定員に関しては、完成年度におきましては各学年80名、3学年ですので240名になるのですけれども、初年度に関しましては、1年生が20人、2年生が30人、3年生が30人で計80人のスタートになっております。

次のページです。教育目標・方針に関してですが、今表記させていただいているのが、東京みらい中学校のスクールポリシー、本校で重視することの枠組みになります。

一番下の学園ミッションで、「人を活かし、困難を希望に変える」。まさしくこのミッションに伴って一番上段にあります学園のビジョン、「人を活かし、日本をそして世界を明るく元気にす

る」という状態を目指していこう。こういったところを挟みまして、東京みらい中学校がどんなことをしながらこの実現に向けていくのかというものと言語化させていただいたものになります。

この中でも3つのポリシーと言われてますグラディエーションポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーについて触れさせていただきます。

アドミッションポリシーは、東京みらい中学校に入ってきてほしい生徒というような形で2点あります。

1つ目が「不登校経験や心身の不安などから学校生活の継続が難しい生徒」。かつ「自分のやりたいことやこれからの目標を見つけたい意志をもった生徒」です。こちらはあくまでも不登校という経験がある生徒が前提になりますので、うちの入学資格として掲げさせていただいております。

続きまして、そういった生徒たちを対象に、どういう教育課程をつくっていくのかというところがカリキュラムポリシーになります。1つ目の観点としては、学校教育法に定められている義務教育として行われます普通教育の目標を前提にしながら、東京みらい中学校として7つの観点を挙げさせていただきました。

1つ目としては、個別最適指導と集団指導を利活用した学習環境を編成していくということ。2つ目が、個別学習時間の設置と学習サポーターを配置することによって学習を展開していく。3つ目としまして、社会とのつながりを基点とする、それを重視しながら探求学習活動を展開していくという点。4つ目、学習喚起・学習定着を促すICTの活用による学校と家庭との学習を充実させるということ。5つ目、家庭受講を前提としたオンライン授業など、こちらもICT活用による継続的な学習機会・学習活動を支援するという点。6つ目、人や社会との関わりによる自己理解やコミュニケーション能力を涵養させていく

ということ。7つ目、多様なチャレンジの機会の設定による成功体験や感動体験を創出していく。この7つの観点を包括的に、学校生活、各教科の授業の中にも組み込みながら、教育課程をつくっていきたいというところになります。

そうした過程を経て、みらい中学校としてどういう人材、どういう生徒たちを送り出していきたいかというのがグラディエーションポリシー「好奇心を持って進んで学び、自ら考え、自ら行動することで社会に貢献する資質をもった人材」ということです。「好奇心を持って進んで学ぶ」という点や、好奇心、チャレンジは校訓にも掲げさせていただいておりますので、本学としての重要なキーワードになります。

次のページをお願いします。

先ほどスクールポリシー、カリキュラムポリシーの中にもありましたけれども、特徴的な新設の教科としてソーシャルスキルトレーニング(SST)とマイタイムというものを事例として挙げさせていただいたものになります。

全体像としては、一番下段を見ていただければ、周りに興味・関心がない・湧かない、自信がなくアクションができないといったスタートのレジネスを前提にしながら、この3ステップによって、先ほど申し上げましたグラディエーションポリシー「好奇心を持って進んで学び、自ら考え」という状態に持っていきたいというところ。このソーシャルスキルトレーニング(SST)では、社会性や人間関係の構築というところを主軸にしながら、包括的、横断的にちりばめながら、コマとしては1週間に1回の授業で展開して進めていくものになります。

マイタイムというものに関しましては、朝夕10分ずつ、自分たちの時間で、その日の目標であったり、その日の振り返りというところで、自らの行動とか明日に向けてという主体性であったり、自律性を習慣化させていく。そういったところを段階的に進めていきます。

欄中に数字で記載させていただいているのが各段階のステップの目標です。こういったところに関わる全教職員、スタッフが認識しながら、この生徒はこういう状況であると共有していきます。

左側の三角の部分が、生徒そのものが目指す状態になります。右側が、そこに関わる教員だけではなく、サポートスタッフも含めて、どういうきっかけを提供していくのかというところを整理させていただいているものになります。

その中で本校の教育課程・学習環境の特徴的なところをまとめていますので、ご紹介させていただきます。

先ほども申し上げましたけれども、中学校の既定の1,015時間から775時間に再編成することで、それ以外の時間を、個別最適というものと、当然ながら学校でするので人との関わり、お友達もそうですし、先生、そういう人との関わりの中から刺激・深化を得られる集団指導。そういったところをうまく併用しながら学習過程を展開するということが前提になっております。

1つ目は授業時間の工夫です。若干始業時間を遅めにしている形になります。既存の中学校と同じ時間帯に行くことや、朝が少し苦手だといったところに対して始業時間を若干遅らせています。あとは実技教科であったり、先ほど申し上げた新設の科目であったり、ちょっとクリエイティブなものであったりとか、インプットだけではなくて体験的な教科をまとめて設定する曜日をつくり、その日だけでも行ってみたいというような時間割の工夫というところになります。

2つ目としましてICTの活用です。様々なICTのツールがありますので、学校の中だけではなくて家庭学習も前提にしています。取組がしっかり履歴に残ったり、それに関わっているスタッフがしっかり記録を見られるとか、それを共有していく。また、生徒自身が自分のやったことが可視化できますので、そういったところに対して

自分自身の自己肯定感や、やったらできたというような学習姿勢・習慣を獲得できればというところになります。

3つ目、学習サポーターの配置になりますが、通常の授業に関しては、教員免許を持った教員が2人体制で実施する。1人はしっかりと授業をしていきます。仮にその場から離れてというところとか、オンラインが必要な場合にはそういったところに対応するというので、基本的には教員が2人体制で授業を展開していく。それとともに、スクールソーシャルワーカーであったり、カウンセラーであったり、そういった教職という形ではないスタッフも、生徒の様子であったり、授業の中でも観察しながら、生徒1人に対して見ている大人の数をできるだけ増やしながら多面的な情報を集約していくという取組になります。

4つ目としては、個別支援を計画的に行っていきます。先ほどマイタイムについて説明をしましたが、学力差だったりとか、それぞれの状況を把握しながら、目的であったり、目標に対してしっかりと個別に対応できるようにしていきます。

それから、長期にわたって残念ながら学校に来られてないという状況も当然想定されると思いますので、そういった場合には、教員、中にあるスタッフが全てやるということよりも、専門的な人材と連携しながら、アセスメント等も実施して個別の状況をしっかりと把握していく、そして共有していくという形になります。

5つ目、ポートフォリオ評価の実施と家庭連携です。先ほども申し上げましたけれども、生徒それぞれの状況、学習においては進捗、できた・できないという状況も含めてですけれども、成長の記録という意味でもデータを管理しながら、それをその次の上級学校にちゃんと引き渡せるようにというところで、このポートフォリオを作成していきたいなと思います。

当然、親御さんは非常にお子さんのことを気にかけていますし、学校に行ったときにどうな

のかとか、本当にうちの子は勉強についていっているのかということもご心配なところもあるかと思えますので、そういった部分でも学内の教員、スタッフだけの情報ではなく、保護者にもお渡しできるようなツールとして、うまくICTなども活用しながらご提供・ご共有できるように構築できればと思います。

最後に6つ目ですけれども、冒頭申し上げましたとおり、学校というものに対して何かしらネガティブだったりとか、ちょっと壁があったりという子たちが結果として不登校というところもあるかと思えます。できるだけ学校に来て、勉強するだけではなくて、何かしら自分が没頭できるものとか興味・関心が見つけられる場所であったりとか、行けば何か刺激があるとか、多様な生徒にとっての居場所になるように、そういったところを設定していきたいなど。そういったものをうまくつくってあげればということになります。

それとともに、物理的な中学校の場所だけではなくて、東京みらい中学校にコミュニティとして参加しているところのつながりの中から、もしかしたらメタバースのような空間であったり、ICTをうまく使いながらコミュニケーションを図れるような、そういったある意味の居場所、物理的などだけではなくて、バーチャルな場でも居場所になるような環境をうまく整備していければいいかなと思います。

最後です。今、学校づくりの真ただ中でありますし、生徒が来て初めていろいろと起こり得ると思えますけれども、学校づくりの最終的なゴールとしましては、このグラディエーションポリシーの具現化という形になります。好奇心を持って進んで学ぶという主体性を持った人材を育成していくために、本校の生徒たちに関わる教職員、スタッフ一同が、ここで考えられている社会生活に必要な心がけとして、学校生活の指針として「好奇心・チャレンジ・感動 未来へ 一歩前へ」というような姿勢を生徒たちが育めるようなア

プローチをとにかくしていきたいというところ

です。そのために学校づくりとして一番重視したいなと思っているところが、好奇心を育むということ。それから多様なチャレンジの機会を設定するという。そして個別をしっかりと見て、その生徒たちに合った小さな成功体験とか、何か心が揺さぶられるような感動体験とか、そういったところを積み重ねていく。そういうプロセスを在学中にいろいろな機会の中から繰り返し創り出していくということです。こういったところを学校全体で多様な教育機会ということで確保・設定していきたいと思っております。

最後に、東京みらい中学校が学びの多様な学校として、学校づくりという過程の中を含めて連携できそうなリソースを挙げさせていただきます。

主に不登校の生徒たちに対して、好奇心の醸成や、チャレンジの機会として構築できる東京みらい中学校だけでなく、三幸学園が持っているリソースとして考えられることですが、1つ目の上段ですが、キャリア教育・職業というよりも、働くということや、社会とつながるということに対しての教育です。それから一歩踏み込んだ、職業というものをもっと知りたいとか、そういう職業教育に関わる専門人材、教員も専門人材の一歩手前ですけれども、専門学校生であったり、足立区にもありますけれども、近隣にもそれを学びとして展開している施設であったり、その教材もありますし、機器もありますので、そういったところもこのツールになり得るのではないかということです。

括弧で挙げさせていただいているのは、今、本学が保有している専門分野の領域です。こういったところであれば、多様な形で機会提供できるのではないかなというジャンルになります。

2つ目、ICT、特に先端映像技術をうまく活用しながら、単なるオンラインということでは

なくて、学習喚起につながったりとか、好奇心醸成につながったりするような映像教材であったりとか、オリジナルのコンテンツの教材化です。

それから2Dの動画だけでなく、撮影や記録というものをうまく使っていければいいかなというところで、この後サンプルの動画をお見せしたいと思います。1つはウォークスルーの3D動画、Matterportというツールを使う動画でございます。2つ目がSwipeVideoというツールを使って撮る自由視点動画。こういった撮影機器を保有していますので、そういったものをうまく使いながらオリジナルの教材ができればいいのではないかと考えております。

下段ですけれども、「学びの多様化に関わる人材を育成・支援する」。こちらは対生徒だけではなくて、そういった生徒たちを支援する・関わる人材を支援していく。そのために何かしら貢献できるのではないかとされるリソースとして挙げられるのが、先ほど足立区様からもありました相互交流の柱1のところ。不登校とか学習支援、発達支援に関わる専門人材。三幸学園にあるフリースクールであったり、令和7年に東京みらい中学校の隣に開所する「児童発達支援センター」であったり、仙台にあります特別支援学校、各所にありますけれども、通信制の高校にもいろいろな人材がおります。そういったところでの取組や、プログラムもうまく活用できるのではないかな。それから、すぐ近くの東京未来大学の大学教員も、地域連携センターということで既に足立区様との連携で関わらせていただいておりますけれども、そういったところも何かしら定期的に相互研究を図ることも可能ではないかなというところ。です。

三幸学園にはソーシャルワークを軸にした人材育成の学校もあります。そういったところでスクールソーシャルワーカーという新しい軸での支援スタッフや、そういった専門人材もうまく活用して育成していく、支援していくスタッフを増

やすという連携もできるのではないかなと考えております。

以上が、先ほどご提示いただいた柱1、2、3をうまく網羅しているのではないかなというところ。特に柱3の職業体験・キャリア教育は本当に得意分野でありますので、学校として連携をするときのポイントとして、専門学校生も、外部に出て何かしら自分の学びをアウトプットするという学習成果と一緒に積ませていただければ、相乗効果が得られるのではないかなと思います。

では、ウォークスルー動画とSwipeVideoの自由視点動画をあくまでもどのようなものかご覧ください。

[動画上映]

これは東京みらい中学校の校舎を専用のカメラでグーグルアースみたいな形で撮影していきます。これが全校舎を撮影したものです。これがAIで立体的に組み込まれます。

これはタグとって、スポーツに関わるところで体育館だったので、お仕事としてこういった気づきの部分を出させていただいて、こちら側が見せたいものとか学ばせたいタグを埋め込んでいきます。自分たちで興味を持ったものとか、こうやって場所とか瞬時に移動しながら探求していきます。

これが東京みらい中学校ですので、学校に来なくても、タグを埋め込んでおいて、ここにはこういうものもあるよとか、学校の中を探検させて、バーチャルですけれども、視覚的に学校にいる経験を積ませて、いきなり来るといよりも、見聞きしたような空間であるといったところもつくり込めるのがいいところになります。

これをオープンキャンパスとかで来てくれた生徒たちに触らせると、非常にスムーズに使いこなします。ちょっと言うだけで、どうやって動くのか自分たちで考えながら進めています。

こちらのほうに関しては、例えば足立区内にあ

るような文教施設であったり、不登校の生徒は現地に行くことが難しいということもあつたりしますので、こういったバーチャルの空間でも何か興味・関心が示せるように、このM a t t e r p o r tとかをうまく使いながら、教材という形にもできるのではないかなと思っております。

〔動画上映〕

もう1つ、S w i p e V i d e o もあります。

こちらは後ろに三脚で立っているものがカメラになるのですけれども、20台ぐらいのi P a dを使って映像を撮って、同時に1つの観点でスワイプすることで、自分の見たいポイントで見られるものになります。例えばリアルで授業の何かしら実技を見学すると、自分の立った位置の視点でしか見られません。しかし、反対側がどうなっているのかなとかいうような別の視点を見て取れるような映像ツールになります。ですので、リアルだけではなくて、自分の関心があるところで止めて、もう一回繰り返し見たりとか、スピードを止めたりということもできます。

こういう自分の見たい視点という意味での自由視点もあるのですけれども、もう一つ、後ろのカメラは被対象者を円で囲う形になるのですが、例えばコンサートのオーケストラの場面で、自分の見たいシンバルであったり、チェロであったり、1個1個にカメラを置いて同時に撮影することで、それぞれ瞬時に興味・関心のある映像を拾って見られるということで、ツールに関しては関心を生みやすいというフックだったり、いわゆる学習喚起、もしくは繰り返して自分の興味があるところが深まるという定着にも使えます。こういったところもうまく使いながら、学校に行ったら面白い教材があるとか何か見られるというようなところを、東京みらい中学校だけではなくて、ぜひ足立区的环境や、地元のをうまく使うことができたらいいかなと思っております。

私からは以上になります。ありがとうございました。

○伊東政策経営課長

ありがとうございました。東京みらい中学のポリシーですとか連携する上でのツール等をご紹介いただいたところでございます。

それでは、質疑と意見交換に入りたいと思います。ちょっと時間が押してきてしまっておりますので、重要な意見ということで行きたいと思いません。ご質問、ご意見がある方、お願いいたします。いかがでしょうか。

○近藤区長

ご説明の中で、バーチャルの居場所もこれから考えていくというお話がありました。先ほど教育長からも話があったとおり、実際に学校に通えない方が、自宅からバーチャルの環境にアクセスして学校生活を疑似体験するという話もありますので、このバーチャルの居場所というのは、皆様方の学校の生徒さんじゃなくても、例えばそれを外部の方たちが利用できるような形、もちろん申込み申請するわけですが、そういった形で外に開くということも想定していらっしゃるのでしょうか。

○高岡氏

ありがとうございます。多分パターンとして、区切りをつければできるのかなと。みらい中学校の教育課程の中で、授業の一環でそういったところを使うという場面と、それ以外の何かしら学びの交流の機会とか、目的を明確にすれば環境はそれぞれでできるのではないかなと思っております。

これまで、メタバースであったりといったところをいろいろと調べたりはしていたのですが、環境設定とか、それを実施する際の通信環境の影響とか、理想はあるのですけれども、実際に運用の面で言うと、メタバースの環境をつくることに非常に経費がかかったりということが一時前ま

でありました。今はそれこそフリーソフトでメタバースが作れるということもありますので、そういったところをチャレンジで環境設定しつつ協議させていただきながら展開できればいいかなとは思っております。

○近藤区長

どうもありがとうございます。

どうぞ、せっかくいらっしゃるので、教育委員の皆様から何かあれば。

○定野東京みらい中学校校長

久保田委員はメタバースとかご専門だから、ぜひご意見をお伺いしたいなど。

○久保田教育委員

メタバースは、NPO法人カタリバ等がかなり広範囲に実施し、多くの自治体が参加している不登校対策です。

また、メタバースは、N校やS校も取り組んでいます。360度映像でなくとも、先ほどあったようにタブレットの中で、AR機能を使えば、負荷なく見ることができると思います。先に紹介していたシステムは技術的に面白い。自分の居場所が空間的に分かるのですね。3Dモデルとメタバース空間がリンクするようなことが可能でしょうか。お教えいただきたいと思います。

○高岡氏

ありがとうございます。

そちらのほうにつきましては、多分別々になるかと思います。メタバースとのリンクというのはテクニカルな問題なので、あくまでも本校としては、生徒たちがそこに対して没入して何かやっているというよりも、そこに行ったときに、こちら側が設定するタグというところがあったと思うのですけれども、そこに例えばリンクを貼るであったりとか、そこに対して学習喚起が起こるよう

な材料を貼っておくというような仕掛けの中で、違う空間の中のメタバースだったり、メタバースなりに展開していくような接続の仕方だったら可能かなと思います。

○久保田教育委員

ありがとうございます。そうすると、全く新規の教室空間を作り、そこを足立区と合同で使うことも可能になりそうだと感じました。ありがとうございます。

○定野東京みらい中学校校長

ぜひご指導ください。

○伊東政策経営課長

ほかにいかがでしょうか。

小関委員、いかがでしょうか。

○小関教育委員

連携という点では、ここ2、3日の間、小学校を訪問したり、チャレンジ学級の先生とお話をし、東京みらい中学校に入学を希望している児童・生徒が3人ぐらいいました。

1人は、中学生で、ある私立の中学校に行っているのだけれども、なかなか登校が思うようにいかずに、区立に行くのが嫌なので考えているというお話がありました。私が心配なのは、東京みらい中学校は私立の学校ですから、経済的に厳しいご家庭とかは、なかなか希望することがないのかなというのが1つ。そして、この間伺ったときのお話で、給食がないと聞きました。お弁当を作ってくるというお話もあったものですから、ご家庭での支援もかなり必要だと思います。それが狙いということもあるのかも分からないのですけれども、この2点ですね。足立の子どもたち、ご家庭で、このような条件を整えていないといけなようなということがあるのかと思うのですけれども、その辺はどういうふうと考えていらっしゃ

るのか。

○定野東京みらい中学校校長

ご懸念はもっともだと思います。まずはここで成功例をつくって、先ほど申し上げた公教育に影響を与えるところはないのかということをやりたい。そうすると、今ハードルがちょっと高いのではという小関先生のお話ですけれども、そのとおりで、例えば給食一つとっても、私も保護者の方と話をすると、まず「いや、子どもたちのために作ります」と言ってくれる保護者の方とコミットして、この学校の運営をしていきたいなと思っています。その上でいろいろなことが分かってくると思います。そうすると経済的な問題であるとか、あるいはそういったご家庭の支援だとか、そういったことが改めて分かると思うんですよ。ぜひそのところをつまびらかにしたい、私はそう思っています。

○小関教育委員

分かりました。

○伊東政策経営課長

早川委員、いかがでしょうか。

○早川教育委員

この間、六月中学校の別室のモデル授業を見学させていただいて、不登校の問題というのは、どこをゴールにするのか。変な言い方で、自分たちの居場所があって、そこにいることができ、そこで卓球をしていたり、自分の好きなことを黒板に書いたりしているだけのお子さん、その子たちは学校が嫌いじゃないから来ている。一方で、同じ教室の中で授業を教えなければいけない先生たちというのもしらっしゃっている。元の教室に戻れるような子をつくるというよりも、足立区のモデル中学で見ると、学校には来られる。時々自分の教室ものぞいてみたいと思って戻れ

る。だけど自分の教室に戻ったら、自分の居場所がないから同じ中学校の別室に来る。でも、もう一回トライしてみようかなという、そういうところが逆にいいのかなと、今はそういう時代なのだなど。不登校を本当に少なくしようとしたら、こういうすごく関わることをやっていかなきゃいけないんだなど。そうすると人材が必要になる。少ない生徒に人材をかけなきゃいけないというのは、足立区としては大変なことだなどは思ったのですけれども。余っている人材も三幸学園でもいらっしゃらないでしょうけれども、うまく交流ができればいいなとは思ったりもしました。すごく人の手がかかることなんだなと思いました、改めて。以上です。

○定野東京みらい中学校校長

そのとおりでと思います。ただ、子どもが減ってきている中で、逆にその子どもたちをどうするのかということを考えやすくなった。そういう時代でもあると思うのですね。一つの懸念は、教員のなり手がいないというのはちょっと懸念なのですけれども、それ以外は子どもの数が減っているというのはチャンスだと。私としては、それを育むというのが我々の責任だと思います。

○伊東政策経営課長

人材の登用については、先日の打合せのときに、熱意のある先生がたくさんいらっしゃるとお聞きしたのですが、その辺りはいかがでしょうか。

○野崎氏

三幸学園の野崎です。

今、新しく開校するに当たって募集しているのですが、この中学校で働きたいという方が全国から応募があります。ちょっと驚いているぐらいの応募です。しかも割と若い人材が。今現在の公立中学校にちょっと疑問を抱いているであったり、新しいところでの自分の活躍の場を求めている

であったりとか、非常に志の高い方に応募いただいているという現状があります。以上です。

○定野東京みらい中学校校長

私としては非常に痛しかゆしで、自分が公教育のところにいるのに、「あ、そういう方が」と。今はありがたいのですよ。今はありがたいのですけれども、非常に複雑な気持ちでした。

ただ、そういうことをやっていくことによって、今の公教育のどこが問題なのか、課題なのか、そういったことがもしかしたら分かるかもしれないというふうにも思っております。

○伊東政策経営課長

倉橋委員、お願いします。

○倉橋教育委員

倉橋です。今日はありがとうございました。

先ほど先生の人材というところで、この間、私も見学をさせていただいたのですけれども、あの方は多分広島だったと思うのですが、その方にお話を聞いたら、ここで自分自身がスキルを身につけて、行く行くは地元に戻って、そのスキルで子どもたちに教えたいとおっしゃっていました。すばらしいなと思って。やはり足立区でも同じように志を持っている先生方はとても多くいると思うのですけれども、今、不登校は個々での対応がとても大事になってきていると思うのです。ただ学校に行けないだけでなく、クラスに入れない、もしくは保健室には行けるけれどもとか、いろいろなパターンがある。家庭に事情がある方もいらっしゃると思うのですけれども、そういう子どもたちと一緒にいられるスキルというのを先生たちが身につける場がないというか。その中でオリジナルプログラムのソーシャルスキルトレーニングを見たときに、とてもすばらしいな、このステップってすごいなと思ったのですけれども、こういうふうな子どもに対してのアプローチの

仕方というのが、今の公立の学校だと難しいのかなと。一人の先生がこのアプローチの仕方が分かっているだけで、多分子どもに対しての対応が変わってくるんじゃないかなと感じました。大勢いる先生の中で、こういうのが難しいという先生もいらっしゃると思うのですけれども、今、六月中でもやっているように、不登校予備軍の登校支援室をやっていますけれども、これは特別な状態になっていると思うのですね。特別なところに先生をつけてというふうになっていると思うのですけれども、そういうことではなく、一つの学校全体でその子どもたちの対応をするということがこれから大事になってくるのかなと感じているので、そのノウハウを足立区の先生たちに、東京みらい中学校に行ってスキルを身につけるのではなく、せっかくあるから、それをどうにか足立区の先生たちに教えていっていただきたいなと今回感じました。よろしく願いいたします。

○伊東政策経営課長

ありがとうございます。

○定野東京みらい中学校校長

まだできていない学校なので、何を教えるなんておこがましいことは当然言えないわけですが、まずは子どもたちに選ばれる、保護者に選ばれる学校になって、そして先生たちが、あれはどうしたらいいのかなというときにお答えできるような、そういう学校にさせていただきたいと思います。ありがとうございます。

○久保田教育委員

先ほどの議論と関連する質問をお願いいたします。学校の価値が変化している中で、東京みらい中学校とか、区から提案のあった登校支援室などの新しい仕組みは非常に大切だと思っています。これを広めるためには、先ほどの六月中学校のように、先生を配属し、教育支援ができなけれ

ばいけない。その先生たちをどのように教育するのが課題になります。東京みらい中学校は全国からたくさんの方が集まっているとお聞きしましたが、その方々をどのように研修する予定でしょうか、これからだと思いますが、計画をお聞かせいただくとありがたいと思っています。

○高岡氏

ご質問ありがとうございます。既に準備室という形で、今年度4月から校舎を建て、開校に向けてということで新たな人材を、後ろにいるスタッフもそうですけれども、採用させていただいているのですが、先ほどちょっとお話の上がっていた従来の中学校の枠組みの考え方、東京みらい中学校はフリースクールではありませんので、まず大前提として義務教育の中学校であるという、ここを非常に大事にしないといけないこと。その中学校、義務教育という枠組みの中で、学びの多様化をどうやって構築していくかということ。うちの進路指導の方針としましては、全日制の高校に行くところを主軸に置いています。三幸学園の姉妹校に通信制の高校があるのですが、そこに促すといったことはありませんで、あくまでも全日制。中学校として次の上級学校にどうやって行くかというのは、ほかの中学校さんと全く同じなのですが、この学びの多様化をどうやって自分たちが考えながら、あの手この手でやれるかというマインドセットをどれだけやれるか。学習指導要領の枠組みの中で運用するということに関しては、いろいろ情報とかノウハウというのはあるかもしれないのですが、発想とか、先ほどちょっと倉橋委員が言われましたけれども、来ている生徒たちの前提が違うので、考え方の基点が違う。いろいろと研修はあるのですが、例えば三幸学園の考え方もそうですが、そういったところをまずつくり出していないと難しいのではないかなと。それにどれだけコミットできる人間が集まってくれるか、そうい

ったところを主眼に置きながら関わらせていただいているということになります。

○久保田教育委員

ありがとうございます。心構えから研修することとは非常に重要なことです。登校支援室の先生方も、心構えを180度変える必要があると思うのです。そこに関連して協力いただくと大変心強いと思いました。ありがとうございます。

○伊東政策経営課長

そろそろ時間も迫ってまいりましたが、そのほか意見のある方はいらっしゃいますでしょうか。よろしいでしょうか。

ありがとうございました。

本日の会議は以上で終了させていただきたいと思います。

今後、皆様からのご意見を参考に、引き続き東京みらい中学校様と連携を図りながら、不登校対策の強化に区としても取り組んでいきたいと思っています。

それでは、令和5年度総合教育会議は以上をもちまして閉会といたします。

ありがとうございました。